

結束性の観点から見た文脈指示

——文脈指示に対する一つの接近法——

庵 功 雄

キーワード：文脈指示，結束性，知識管理，テキストの意味，「この」と「その」

0. は じ め に

佐久間（1951）が「こそあど」を研究対象として取り出してから日本語の指示詞研究は始まった。その研究は三上（1955，1970），久野（1973），黒田（1979）等を経て，金水・田窪（1990，1992）において一つの到達点に達した。

金水・田窪（1990・1992）は，日本語の指示詞の全用法を「メンタルスペース理論」の枠組みで説明したものである。この理論は談話における知識管理に関する強力な理論装置であり（cf. 田窪（1989，1990）），その装置に基づく金水・田窪論文は極めて魅力的である。

しかし，論者は「文脈指示」の記述のためにはこのアプローチは不十分であると考ええる。即ち「文脈指示」の中には「知識管理」的なアプローチに適したタイプのもものと適さないタイプのもものがあり，後者の記述には独自の装置が必要であると考えるのである。その装置とは「（テキストの）結束性」である。

本稿の目的は「結束性」の観点から捉えるべきタイプの文脈指示研究に明示的な方法論を導入することにある。

1. 2つの文脈指示

前節で文脈指示には「知識管理的」的アプローチに適したものと適さないものという2つのタイプが存在すると述べた。ここではこのことを考える。指示詞コソアの文脈指示用法には次の二つの対立があると考えられる。

- (1) a. ソ系統ーア系統
- b. コ系統ーソ系統

1-1. 知識管理に属する文脈指示

(1a)は久野(1973), 黒田(1979), 吉本(1992), 金水・田窪(1990, 1992)等で扱われてきた「文脈指示のア」と「文脈指示のソ」の対立である。これまでの文脈指示の研究は主にこの対立の解明に当てられてきたと言える。その成果は春木(1991)や金水・田窪(1992)にまとめられている。例えば次例を考えてみよう。

(2) 昨日街で山田さんに会いました。あの／＊その人は相変わらず元気でした。

(3) A: 昨日街で山田さんに会いました。

B: ＊あの／その人は誰なんですか。

(2)でアが使える(3B)では使えないのは、話し手が「山田さん」を知っているか否かの違いに由来する。つまり「文脈指示のア」*¹が使えるためには「話し手が指示対象を知っている」ことが必要なのである。ここで重要なのはこの場合のソ系統とア系統の対立は「(指示対象に対する)話し手の知識」(及び二次的には「聞き手の知識」)に由来するものであるということであり*², その意味で金水・田窪(1990, 1992)のような「知識管理」的な枠組みからの説明に適したものである。

本稿では(2)(3)のように指示詞に使い分けが「(話し手の)知識」に依存する文脈指示を「知識管理に属する文脈指示」と呼ぶ。

1-2. 結束性に属する文脈指示

次に(1b)について考える。このコ系統とソ系統の対立は「多くの場合言い換え可能である」として、これまで余り研究されてこなかったものだが*³, 新聞記事や小説の地の文などの「語りもの」(金水(1988))における文脈指示であり、日本語のテキスト分析という観点から見ると中心的なものの一つである。

例えば、次例を考えて頂きたい。(なお以下, ＊, ??等は「連文としての解釈」に対するものとする。また ϕ は要素がないことを示す)

(4) 洋子は「あなたなしでは生きられない」と言っていた。(a)その／＊この／＊ ϕ 洋子が
今は他の男の子供を二人生んでいる。

(5) エリザベス・テラーがまた結婚した。(a)この／＊その／?? ϕ 女優が結婚するのは
これで7回目だそうだ。

(4a)(5a)が先行文連鎖と「つながった」ものとして解釈されるためには(4)では「その」の、(5)では「この」の使用が義務的である。

ここで「結束性」を次のように定義する。

- (i) 結束性 (cohesion) とは、文 (連続) が結束装置**により一つの意味的まとまり (テキスト) を構成することである。

すると、(4)の「その」、(5)の「この」はテキストの結束性に貢献していると言える。

こうしたタイプの文脈指示のコ系統とソ系統の対立は前述の「知識管理的」なアプローチでは十全に捉えられないと考えられる。なぜなら、この場合の使い分けは話し手や聞き手の「知識」に依存するものではなく、どのようにテキストを作っていくかというテキストの結束性に依存するものだからである*5。

以上のことから本稿では(1b)のタイプの文脈指示を「結束性に基づく文脈指示」(以下、特に断らない限り「文脈指示」は「結束性に基づく文脈指示」のことを指すものとする)におけるコ系統とソ系統の対立を論じることにある*6。

2. 結束性の観点から見た文脈指示

本節では結束性の観点から文脈指示を見ることで明らかになる現象を「この」と「その」の対立を中心に見ていく。

2-1. テキスト的意味の付与 (テキストレベルの結束性)

ここでは林 (1983) の言う「指定指示」の「この」「その」の使い分けの原理を考える。

林 (前掲) は「この」と「その」に、次のように定義される「指定指示」「代行指示」という二つの用法があることを指摘している。

- (ii) 指定指示とは限定詞「この」「その」全体が指示機能を担う場合の指示であり、代行指示とは「こ」「そ」の部分だけが指示機能を担う場合の指示である。

各々の例は次のようなものである。

- (6) 昨日久しぶりでぜんざいを食べたが、そのぜんざいはなかなかうまかった。

- (7) 昨日久しぶりでぜんざいを食べたが、その味は最悪だった。

つまり(6)では「そのぜんざい」全体で先行詞と照応しているので「指定指示」であり、(7)の「その味」は「それ(=昨日久しぶりで食べたぜんざい)の味」の意味であるから「代行指示」である。

以下、指定指示における「この」と「その」の使い分けを考察するが、まず初めに、その際に有用になる概念である「テキスト的意味」を導入する。次例を考えて頂きたい。

- (8) 元文元年の秋、新七の船は、出羽国秋田から米を積んで出帆した。その船が不幸にも航海中に風波の難にあつて、半難破船の姿になって、積荷の半分以上を流失した。
(森鷗外「最後の一句」。長田(1984)より)

この場合の「その船」は「[元文元年の秋、出羽国秋田から米を積んで出帆した新七の]船」である。換言すればこの場合の「船」はその語彙的意味の他に、このテキストに固有の「元文元年…新七の」という意味を持っている。これを「テキスト的意味」と呼ぶ。定義すると次のようになる。

- (iii) 名詞句がその語彙的意味の他にテキスト毎に臨時的に持つ意味を「テキスト的意味」と言う。

次に、指定指示の「この」と「その」に関する実例を見ていく。

- (9) 自分が苦しい時は相手も苦しいものだ。この辺からプロでも二転三転することはよくある。が、羽生 [はぶ] が勝つと誰もが思っていた。時代がこの (/ * その / φ) 21歳の天才を呼んでいるようにも映った。(鈴木輝彦「観戦記」日経新聞夕刊 1992.10.26)
- (10) 名古屋・中村署は、殺人と同未遂の疑いで広島市内の無職女性(28)を逮捕した。調べによると、この (/ * その) 女性は20日午前11時45分ごろ名古屋市内の神社境内で、二男(1)、長女(8)の首を絞め、二男を殺害した疑い。長女は命に別状はないという。(「日刊スポーツ」1992.11.22)
- (11) 三木知事は一九八一年、三木武夫元首相派の現職知事を破って初当選した。三木知事を全面的にバックアップしたのは、当時、元首相と敵対関係にあった後藤田氏だっ

た。(a)その(／＊この／＊φ)後藤田氏が、今回は指示の統投阻止に回った。(「AERA」1993.5.25)

- (12) 事業の発注情報をいち早く入手し、役所や政治家、業者間での根回し、調整を図る業務屋の仕事は、基本的には手帳一冊の世界だという。

この(／その)手帳に土建業者、各ゼネコンの営業所、業務担当者の名前、住所、電話番号、緊急の連絡先などが書かれていて、いつでも連絡がとれるようになっている。(「週刊朝日」1993.8.6)

(9)–(12)における先行詞と照応名詞句の関係と、「この」「その」の分布を整理すると次のようになる*7。

(13)

(9)	言い換えあり	この／＊その
(10)		
(11)	言い換えなし	＊この／その
(12)		この／その

(13)から分かることは次の2点である*8。

- (iv) a. 言い換えがあるときは「その」は使えない。

- b. 言い換えがないときには、

ア. 「この」だけが使える

イ. 「その」だけが使える

ウ. 「この」も「その」も使える

の3つの場合がある。

(iva)に関し、今(5)(9)の照応名詞句(下線部の名詞句。Referred NP。RdNPと表す)を考えると、そこには前述の「テキスト的意味」が付与されていない(例えば(9)の「この21歳の天才」は「羽生」に照応するだけで、その他にテキスト内で属性を付加されていない)ことが分かる。この直感を生かし、(iv)をテキスト的意味という概念を用いて捉え直すと次のようになる。

- (v) a. 言い換えがある時はRdNPには「テキスト的意味が付与されない」。

- b. 言い換えがない時はRdNPに「テキストの意味が付与され得る」。

(va)から次のことがわかる。

- (vi) a. 「この」には定性 (difiniteness) のみをマークする機能がある*9。
b. RdNPにテキストの意味が付与されない時は「その」は使えない。

次に(vb)の場合の「この」と「その」の使い分けについて考えよう。初めに(11)を考えてみよう ((4)も同じタイプである)。

(11a)は「Xが今回は知事の続投阻止に回った」という構造をしている。この文が先行文連続と結局的であるには、Xが「知事の続投阻止に回るはずがない」という属性を持つ必要がある。一方(4)(11)から分かるように、この場合「この」は使えず、被修飾名詞が固有名詞であるにも関わらず限定詞が省略できない*10。以上のことから次のことが分かる。

- (vii) a. 「その」はRdNPへのテキストの意味の付与をマークできる。
b. RdNPへのテキストの意味の付与が極大化すると「この」は使えない*11。

(10)で「その」が使えない理由は(viib)と相補的に説明できる。即ち次のようである。

- (ix) RdNPへのテキストの意味の付与が極小化すると「その」は使えない*12。

換言すると、テキスト内での照応名詞句の捉え方には、「当該のテキストのトピックとの関与性」の多寡、「テキストの意味の付与」の多寡という二つの捉え方があり、両者は反比例関係にあると考えられるのである。

つまり、(10)の環境では「トピックとの関与性」という観点からの捉え方しかできず、(11)の環境では「テキストの意味の付与」という観点からの捉え方しかできないのである。

これに対し、(12)の環境ではこの二つのどちらの捉え方も可能である(「この手帳」と言う場合には「今話題になっている手帳」という捉え方になり、「その手帳」という場合には「事業の発注情報をいち早く入手し、役所や政治家、業者間での根回し、調整を測る業務屋の仕事を支えている手帳」という捉え方になる)。(12)で「この」も「その」も使えるのはこのためである。

2-2. 語彙・文法的レベルの結束性

前述のように「この」「その」には「代行指示」の用法がある。次例を考えて頂きたい。

- (14) 昨日公園で先生が(a)その／(b)*この／(c)φ著書を読んでおられた。
(15) 出家と(a)その／(b)*この／(c)φ弟子
(16) 昨日公園で先生が*その／*この本を読んでおられた。
(17) 出家と*その／*この男の子

(14)で「この著書」と言うと、先行文脈の存在が含意されてしまい、単独文としては不適格になる。(15)も同様に、単独表現として適格にするには「その」を用いる（あるいは限定詞を省略する）必要がある。

一方、(16)の「本」の場合は「その」も「この」も不適格になる。(17)も同様である。これはどのように説明できるだろうか。

論者はこれは名詞の語彙構造が統語現象に反映したものであると考える。つまり「著書／弟子」と「本／男の子」では名詞句の内部構造が異なるのである。

ではその違いとは何か。それは前者が「誰の／何の」（以下、指定部 (specifier) と呼ぶ）を必須的に要求するのに対し、後者はそれを必須的には要求しないということである。本稿では前者のタイプの名詞を「1項名詞」、後者のタイプの名詞を「0項名詞」と呼ぶが、両者は次のような統語的テストで区別できる。

- (18) A：昨日著書を読んだよ。
B：えっ、誰の／*どんな。
(19) A：昨日かどですねを打ってね。
B：えっ、何の／*どんな。
(20) A：昨日本を読んだよ。
B：えっ、誰の／どんな。
(21) 太郎が読んだ。

即ち「著書」や「かど」のような1項名詞を第一発話で限定詞なしで用いると、必ず疑問を誘発するが、そのときに現れる疑問詞は、属性を尋ねる「どんな」ではなく、「誰の」「何の」である。一方「本」のような0項名詞の場合は「どんな」も現れうる。一般に、指示対象が確定した名詞についてのみ属性を尋ねることができると考えられるので、

(18A)の「著書」、(19A)の「かど」は単独では意味的に不充足であると考えられる。これは(21)のような文が不充足である (cf. 寺村 (1982)) のと同じであり、その意味で1項名詞の指定部はその名詞の「項」だと考えられる。

以上の議論から1項名詞は指定部を内包しておりその指示対象が決まらない限り完全名詞にはならないと考えられる*¹³。このため1項名詞 (の指定部) は同一文中の他の名詞句と照応する (その名詞句によって指定部を制御(control)される) ことが可能なのである*¹⁴。こう考えると(14)(15)で「この」が使えないのは統語的理由によると考えられる*¹⁵。

ここで「1項名詞」に関する興味深い現象を指摘する。次例を考えて頂きたい (なお! は指示対象が異なることを、i, jは同一物指示を各々示す)。

(22) 井伏鱒二氏が、十日午前十一時四十分、肺炎のため…死去した。(中略)六五年、「姪の結婚」に始まる「黒い雨」の連載を開始。知人の日記や体験記、病床日誌などをもとに、原爆投下直後の惨状を淡々と描き、野間文芸賞を受賞した。この (! その / * ϕ) 作品は英訳されて英米で絶賛されたのをはじめ、世界に紹介された。(朝日新聞朝刊1993.7.11。一部手を加えた)

(23) 佐藤栄作は、別名“人事の佐藤”という。およそこの人ほど、政界の人脈をすみのすみまで知りつくしている人間はほかにあるまい。彼が日本の近代政治史上、最長宰相在位期間の記録を更新できたのも、ひとえにこの / ! その / ! ϕ 能力による。

(立花隆「エコロジー的思考のすすめ」)

(22)の「作品」、(23)の「能力」は1項名詞であると考えられる。従って、(22)の「その作品 / 作品」は指定部が「井伏鱒二氏」によって制御された読み (「井伏鱒二氏の作品」) を持つ (23)の「その能力 / 能力」の場合も同様)。一方、「この作品」と言う (「この」には定性のみをマークする機能があるので) 全体で「黒い雨」を指すことになる。また(23)の「この能力」の場合は (「この」には「ラベル貼り」の機能もある (cf. 注7) ので) 破線部を指す (特に(23)の場合「この」と「その」で表現内容が大きく異なることに注意されたい)。

(22)(23)は特殊な例ではなく、一般に1項名詞が文連鎖の中で用いられ、先行文 (連鎖) 中に「このN」の先行詞として適当なものが存在するという(24)の環境では同様の多義性が生じる (ただし、Nは1項名詞でX ≠ N)。

(24) …Xi…Yj…このNi / そjのN…。

3. ま と め

本稿ではまず、文脈指示の中に2つのタイプがあり、1つのタイプは金水・田窪（1990, 1992）等で主張されている「知識管理」的な枠組みではなく、「結束性」という観点から捉える必要があることを主張した。

次に2章では「結束性」をテキストレベルのものと、語彙・文法レベルのものに分け、その各々において上述の主張の具体例を「この」と「その」の使い分けを通して検討した。

（参考文献）

- 庵 功雄 (1993) 「テキスト的意味の付与について—文脈指示における「この」と「その」の使い分けを中心に—」 m.s.
- 金水 敏 (1986) 「連体修飾成分の機能」『松村明教授古稀記念国語研究論集』明治書院
- 金水 敏 (1988) 「日本語における心的空間と名詞句の指示について」『女子大文学 (国文編) 39』大阪女子大学国文学科
- 金水 敏 (1990) 「指示詞と談話の構造」『月刊言語』1990年4月号
- 金水 敏・田窪行則 (1990) 「談話管理理論からみた日本語の指示詞」『認知科学の発展vol. 3』講談社サイエンティフィック
- 金水 敏・田窪行則 (1992) 「日本語指示詞研究史から／へ」(金水・田窪編 (1992) 所収)
- 金水 敏・田窪行則編 (1992) 『日本語研究資料集 指示詞』ひつじ書房
- 久野 暉 (1973) 「コ・ソ・ア」『日本文法研究』
- 黒田成幸 (1979) 「(コ)・ソ・アについて」『英語と日本語と』くろしお出版
- 佐久間鼎 (1951) 『現代日本語の表現と語法』(くろしお出版から復刊)
- 正保 勇 (1981) 「『コソア』の体系」『日本語の指示詞』国立国語研究所
- 田窪行則 (1989) 「名詞句のモダリティ」『日本語のモダリティ』くろしお出版
- 田窪行則 (1990) 「対話における知識管理について」『アジアの諸言語と一般言語学』三省堂
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版
- 長田久男 (1984) 『国語連文論』和泉書院
- 仁田義雄 (1977) 「「文の文法」から「文を越える文法」へ—「後日大阪へ行ッた」の有する連文機能をめぐって—」『佐藤喜代治教授退官記念国語学論集』桜楓社
- 林 二郎 (1983) 「代名詞が指すもの、その指し方」『朝倉日本語講座五 運用Ⅰ』朝倉書店
- 春木仁孝 (1991) 「指示対象の性格からみた日本語研究の指示詞—アノを中心に—」『言語文化研究』17 大阪大学言語文化部
- 堀口和吉 (1990) 「指示詞コ・ソ・アの表現」『日本語学』9-3
- 三上 章 (1955) 「代名詞と承前詞」『現代語法新説』(くろしお出版から復刊)
- 三上 章 (1970) 「コソアド抄」『文法小論集』くろしお出版
- 安井 稔・中村順良 (1984) 『現代の英文法10代用表現』研究者
- 吉本 啓 (1992) 「日本語の指示詞コソアの体系」(金水・田窪編 (1992) 所収)
- Corblin, F.(1983)“Défini et démonstratif dans la reprise immédiate” (Le français moderne 51-2)
- Gundel, J. et al. (1989)“Givenness, Implicature and Demonstrative Expression in English discourse” (CLS 25)
- Halliday, M. A. K. & Hasan, R.(1976)“Cohesion in English” Longman

- *1 ア系統には本質的な意味の文脈指示用法はないので、この用法は厳密には「観念指示」と読んで「文脈指示」とは区別すべきである (cf. 三上 (1970), 春木 (1991))。
- *2 金水・田窪 (1992) は話し手のメンタルスペースを「直接経験的領域」と「間接経験的領域」に大別し、「聞き手の知識」は後者に埋め込まれていると考えている。
- *3 例えば堀口 (1990: 66) は次のように述べている。

(ア)〈文脈指示〉におけるコとソの使い分けを支配するのも、やはり話し手の対象に対するかかわりの気持ちである。話し手がかかわりの気持ちを排していわば中立的・客観的に対象を捉えるばあいはソが用いられるであろうし、かかわりの気持ちをもっていわば非中立的・主観的に対象を捉えるばあいはコが用いられるであろう。そのいずれをもちいるかは、まったく話し手の気持ちしだいである。

こうした記述はこのタイプの文脈指示に対する説明を放棄したに等しい。しかし、実際は後で述べるように、この場合のコ系統とソ系統の使い分けにもかなり明確な原理がある。本稿では(ア)のような記述への代案として、可能な限り明示的な使い分けの原理を提示する。

- *4 本稿では「指示」「代用」「省略」「接続表現」を「結束装置」(cohesive devices)と呼ぶ (cf. Halliday & Hasan (1976)). ただし個々の結束装置の内包は日英両語において全同ではない。また論者は日本語の「語彙的結束性 (lexical cohesion)」は「代用 (substitution)」の下位分野であると考えているが紙幅の関係上、その論証は別項に譲ることにする)。なお、テキストの中には次例のように結束性を持たないものがある。

(イ) A: 電話だよ。

B: 今風呂に入ってるんだ。

A: 分かった。

こうした文連続には(文法的概念である)結束装置は存在しないが、全体はテキストだと感じられる。本稿ではこうしたものは「結束性」は持たないが、「一貫性 (coherence)」は持っていると考え。一般に全てのテキストには一貫性がある (cf. Widdowson (1978))。

- *5 金水・田窪 (1992: 189) では、前文で導入された「概念的知識」は「間接経験的領域」に属するとされ、金水 (1990) では「文脈指示のソ」を扱うために「L(anguage)スペース」という概念が設定されている。このことからメンタルスペース的アプローチでもこの対立を扱えると考えられるかもしれない。しかし、この理論ではコ系統とソ系統の対立が明確ではない。例えば「文脈指示のコ」が使える条件として「卓立性」(金水・田窪 (1992: 191)) が立てられているが、この条件では、(4)や(11)で「この」が使えないことや、(22)(23)において「この」と「その」で指示対象が異なることが説明できない ((4)の「洋子」は卓立性を持つと考えられる)。こうした理由から(1b)の環境でのコ系統とソ系統の使い分けにはこのアプローチでは明確にできないように思われる。論者は金水・田窪 (1992) 等のように指示詞の全用法を同一原理で説明するよりも、むしろ(1b)のタイプの文脈指示は「結束性」に基づき機能的に説明する方が妥当ではないかと考える。なお、言うまでもなく「知識管理」的に説明されるタイプの文連鎖にも「結束性」は存在する。ここで主張しているのはあくまで指示詞の使い分けの原理を「知識管理」に求めるのか「結束性」に求めるのかということである。
- *6 ただし、コ系統とソ系統の対立の中にも、次例のように「知識管理」的アプローチに適したものもある。
- (ウ) A: 私達今度「玉姫殿」で結婚式をあげるんです。

B: おめでとう。で、そこ／＊ここへはどうやって行ったらいいの。

- *7 (9)(10)の他にも「この」しか使えない場合が二つある。一つはテキスト内で先行詞と照応名詞句の間の距離が離れた場合であり(紙幅の関係で例文は省略)、今一つは次のタイプである。

(ニ) 夜、ある町の外科医のところへ大怪我をした男が治療を受けにきた。住所をきくと隣の町から来たという。

「隣の町なら、有名な外科医がいるのに、どうしてわざわざここまで来たんです？」

この(／＊その)ジョークのオチは読者に考えていただこうとおもう。(織田正吉『ジョークとトリック』)

この場合、破線部は「ジョーク」という名前を与えられることでディスコース内に存在できるようになる。本稿ではこの用法を「ラベル貼り」と呼ぶが、この用法は「この」にのみ見られるものである。

*8 (10)～(12)は各「タイプ」の例である。従って、文脈が変われば別のタイプに移行し得る。例えば(11a)を(お)のようにすると、(12)のタイプに移行する。

(お) この／その後藤田氏は今回も三木知事を支援することを表明した。

しかし、(9)と(10)～(12)は質的に異なるものであり、「言い換え」がある場合に「その」が使えるケースは極めて稀である。

*9 この機能は定冠詞を持つ言語では「定冠詞」が持つ機能である (cf. Corblin(1983), Gundel et al.(1989))。

*10 このことから「この」「その」の機能が単なる指示対象の限定だけにあるのではないことが分かる。

*11 テキスト的意味の付与が極大化している時には、(11a)から分かるように、照応名詞句がそれを含む文の中で何らかの属性を帯びていなければ結束性が損なわれる。

*12 極大化の場合に比べ、極小化を測るのは容易ではないが、次例のような「という」を伴うメタ的表現は極小化の指標になり得る (ただし絶対的なものではない)。

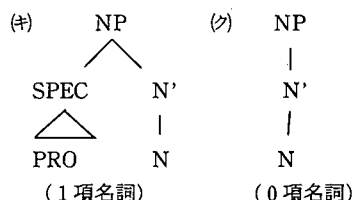
(お) フジテレビ系「カルトQ」はただのクイズ番組ではない。…

二十一日放送のテーマはブーム再来の大相撲。…出場者らは、取組の映像を瞬間的に見るだけで、それが何年の何場所の何日目の対戦であったかを、たちどころに当ててしまう。おそらくほとんどの取組の様子が、何度も反すうされ、記憶されているのだろう。相撲が好きだということは、こういうことだといっているかのようだ。

そうした細部への「健全な精神のバランス」を欠いたどこかオタク的熱狂のアブナさ、それがこの番組の魅力である。…

何かを好きになるとき、誰でもこの(／＊その)アブナさというものに出会う。「好き」と言うことを突き詰めると、それには確たる理由がないことに気づくからだ。(朝日新聞朝刊「キュー」1993.2.26。一部手を加えた)

*13 1項名詞、0項名詞の構造は各々(＊)(ク)のようなものであると考えられる。



*14 制御は次例のように運用論的 (pragmatic) なものでもよい。

(ク) 弟は出かけています。(「弟」=「話者の弟」)

*15 日本語では移動などで生じた空範囀の位置に、指示詞を挿入することができるが、(コ)(ク)から分かるように、その際許されるのはソ系統に限られる。例えば、(サa)は(サb)に由来し、(サc)で移動の結果生じた空所に「それ」を埋め草 (filler) として挿入したものと考えられるが、こうした埋め草としての用法はコ系統にはない。一方、(14c) (15c)が各々(14a) (15a)と同義であることから分かるように、この場合のソ系統も埋め草としての用法であり、そのためコ系統は使えないのである。

(コ) 太郎がそこ／＊ここからやってきた駅

(ク)a. 今のままでは生活 i それ i／これ i 自体が成り立たない。

- b.今のままでは生活自体が成り立たない。
- c.今のままでは生活 $i \phi i$ 自体が成り立たない。

(いおり いさお 本学大学院生)